

令和5（2023）年度 相愛中学校・高等学校「学校評価」

1. めざす学校像

相愛中学校・高等学校は、仏教とくに浄土真宗のみ教えに根ざした女子教育を教育の柱とし、130年をこえる歴史を経ても、建学の精神である『當相敬愛』を見失うことなく、「自利利他」と「共生」の思い、知性と教養、品格を備えた女性を育成し、社会に多くの有為な人材を輩出してきた。しかしながら、ますます激化する私学間競争に生き残り、本校が発展的に存続していくためには、他校にはない独自性を社会および本校のステークホルダーに対して魅力的に発信し、信頼を獲得していくことが必要である。

昨今、少子化問題、超高齢化問題など、社会を取り巻くさまざまな課題が取りあげられているなかで、インターネットの普及やAIの発展など、社会構造のグローバル化がいつそう加速化し、人の社会的関係性、役割など私たちの身近な環境が大きく変化しつつある。これからの社会においては、人と人とのつながりに“響感”する豊かな感受性を原動力として、新たな社会を創造し、その形成に主体的行動力をもって寄与していく女性の活躍がますます求められることは間違いない。長年にわたり、女子教育を担ってきた本校だからこそ、次世代のグローバル社会を見据え、キャリアデザイン能力を伸ばす女子教育の重要性をあらためて感じている。

このことを踏まえ、今後の教育ビジョンとして、『當相敬愛』の精神に根ざした「自利利他」と「共生」という仏教の教えの本質を主体的に、そしてアクティブに探求することのできる学びと実践の環境を拡充、発展させていくことで、次世代の社会的ニーズに適合する「グローバル社会に貢献する女子のキャリアデザイン」の推進を図り、これを本校の特色ある教育活動として確立することをめざす。

2. 中期目標

本校の教育ビジョンを明確にすべく2018年度当初、「相愛中学校・高等学校第1次将来構想～その方針と推進方法」を土台として、具体的な教育ビジョンの策定に取り組むべく、将来構想委員会をスタートさせ、2019年に「相愛中学校・高等学校第1次将来構想」を策定した。第1次将来構想は、これからの社会に求められる人物像をいかに捉え、どのようにその育成をはかるかという点に重点を置き、当面（約5年間）取り組むべき課題について取りまとめている。今後の教育活動の方向性としては、2015年に国連サミットにおいて採択、スタートした国連グローバル・コンパクト（UNG C）の取り組みに基づいた「持続可能な開発目標（SDGs : Sustainable Development Goals）」の推進を、建学の精神の具現化をはかる中期的な達成目標と位置づけ、その達成に向けた探求学習、課外行事などの活動内容を具体化させていくものである。

また、第1次将来構想では、以下に挙げる教育面の主な改革テーマに関して、具体的なビジョンを30項目にわたって示している。

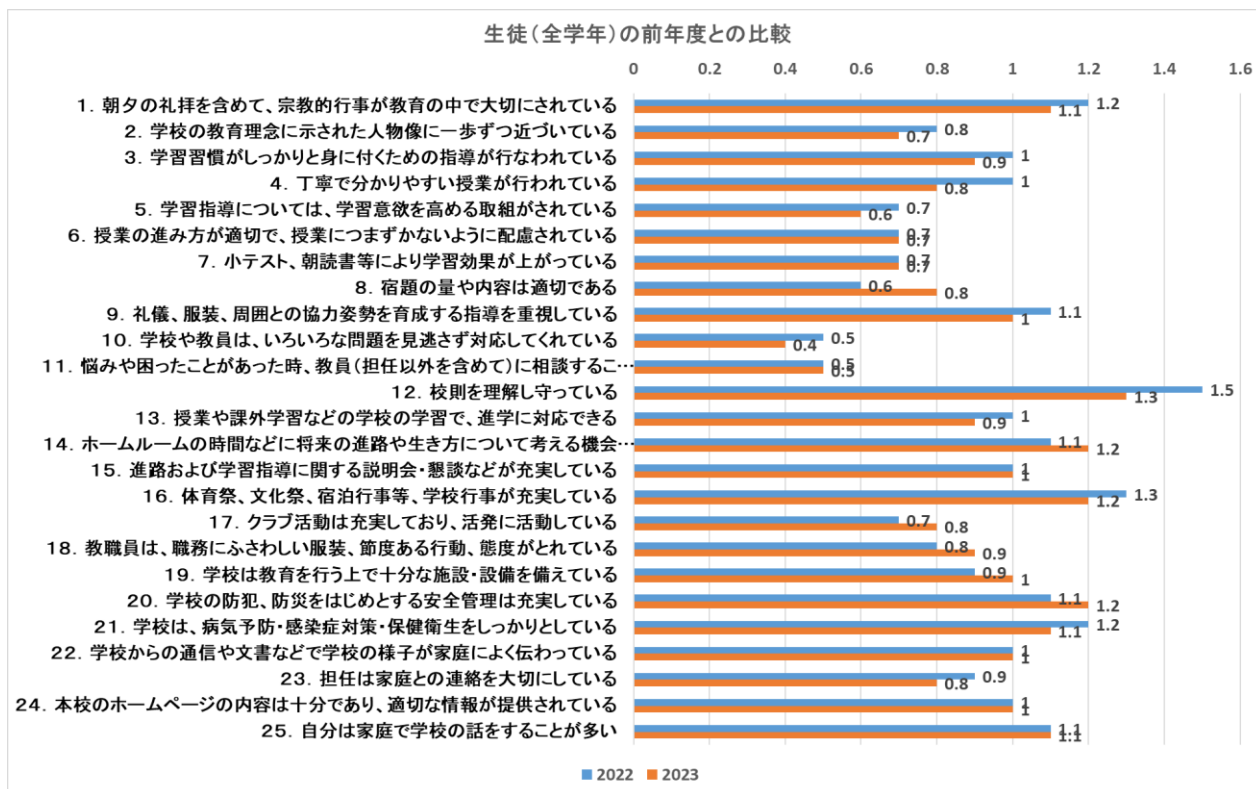
- ・教育の質(1) 建学の精神を具現化する教育活動の再構築
 - 1 本校の「独自性」の明確化
 - 2 「共生」と「自利利他」の視点に立脚した学校生活の確立
 - 3 建学の精神に即した学校行事、ロングホームルーム（LHR）など特別活動の展開
- ・教育の質(2) グローバル社会に貢献する女子のキャリアデザイン
 - 1 相愛独自のキャリア教育プログラムの構築
 - 2 地域社会への貢献活動の展開
 - 3 グローバル社会を見据えた国際交流プログラムの拡充と留学制度の見直し
 - 4 高大連携の拡大によるキャリアサポートの深化
- ・教育力 教育行政の変革をふまえた教育活動の高度化
 - 1 教育行政の変革をふまえた中学・高校カリキュラムの総合的な見直し
 - 2 中学・高校における各コースの特性と状況に応じた教育展開と教科指導の改善
 - 3 高大接続改革に伴うICT教育の推進

3. 学校評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見

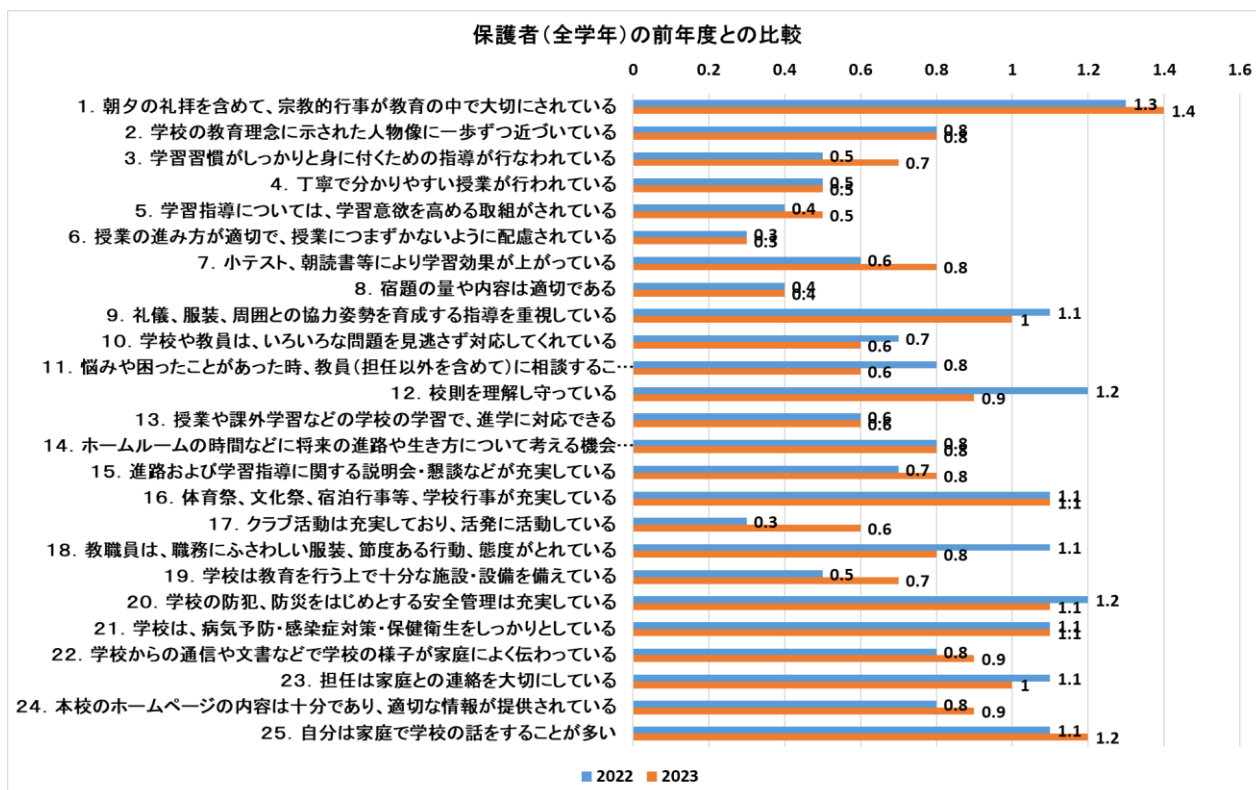
学校評価アンケートの結果と分析 [2024 年2月実施]	学校関係者評価委員会からの意見 [2024 年 9 月 9 日実施]
2022（令和4）年度よりアンケート調査を外部委託から学内実施へと変更したことに伴い、それぞれの質問項目について、2021（令和3）年度までの「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「わからない」という、客観的な要素を含む「評価」を回答するものから、「とても満足している」「満足している」「あまり満足していない」「満足していない」「わからない」という、回答者の主観的な「満足度」を聞く回答の選択肢へと変更している。したがって過去2年間における各項目の満足度を前年度との比較とともに、生徒、保護者で別々に行った。 分析方法については、各質問項目の回答を： 「とても満足している」・・・・・・3点 「満足している」・・・・・・1点 「あまり満足していない」・・・・・・1点 「満足していない」・・・・・・3点 「わからない」・・・・・・0点 と点数化し、全回答者、あるいは学年ごとの平均ポイントを算出した。 ※4ページのグラフ参照 【生徒】 ポイントが「1.0」以上で一定の評価が得られている項目は： 「1. 宗教的行事」→「1.1」 「9. 礼儀・服装・協力姿勢育成指導」→「1.0」 「12. 校則順守」→「1.3」 「13. 大学進学対応」→「1.0」 「14. 生き方指導」→「1.2」 「15. 説明会・懇談の充実」→「1」 「16. 学校行事の充実」→「1.2」 「20. 安全管理の充実」→「1.2」 「21. 病気予防・保健衛生の対策」→「1.1」 「22. 通信や文書」→「1.0」 「24. ホームページの内容」→「1.0」 「25. 家庭での学校の話」→「1.1」 一方でポイントが「0.5」未満の項目は 「11. 教員相談」が「0.4」となっている。 【保護者】 ポイントが「1.0」以上で一定の満足度が得られている項目は： 「1. 宗教的行事」→「1.4」 「14. 生き方指導」→「1.1」	(アンケート全体に関して) 【問題対応】 ・中学生の保護者は、教育熱心に子育てをしている家庭が多く、私立学校に期待することも大きい。生徒同士のトラブルがあった時には、初期対応に注力し、担任だけでなく、学年や生活指導など、学校が一丸となって迅速に情報共有をし、生徒のケアを行うとともに、家庭との密な連絡も大切にしてくださいのが良いと思う。 【教養科目について】 ・日本文化に触れる教養教育は相愛の特色でとてもいいと思う。必修化等も含めて今後の充実を検討してほしい。 【進路指導について】 ・学校の課外授業等で、将来のことについて話して下さったり、一緒になって考えていただけたらして、ありがたい。

「16. 学校行事の充実」→「1.1」 「20. 安全管理の充実」→「1.2」 「21. 病気予防・保健衛生の対策」→「1.1」 「23. 家庭との連絡」→「1.1」 「25. 家庭での学校の話」→「1.1」 一方で、ポイントが「0.5」未満となっている項目は： 「6. 授業の進み方」→「0.3」 「8. 宿題の量や内容」→「0.4」 となっている。 【全体として】 前年度よりも0.3ポイント以上、評価が下がった項目は、保護者の「12. 校則順守」の「-0.3」のみであったが、生徒、保護者ともに、前年度比でやや下降した項目も見られるため、次年度に向けて原因究明と改善が必要である。	
---	--

4 中高全体の評価の前年度との比較 生徒



保護者



5. 本年度の取り組み内容および自己評価

今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1. 将来構想の推進	2019年5月策定の「第1次将来構想」に基づき、「将来構想委員会」を計画的に開催（週1回）し、各部署が作成した「実施すべき活動にかかる計画書」の検証を継続。	将来構想委員会を計画的に開催しているか： 1. 「将来構想委員会」を年度当初より計画的に開催できたか。 2. 各種活動が実施できたか	目的や活動の明確化については将来構想委員会において推進を継続できている。 1. 定期的、継続的に開催することができた。 2. 文部科学省より 2023（令和 6）年度末までに策定が求められている 3 つのスクールポリシー、「グラデュエーション・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」の策定について検討を進め、最も重要項目である「グラデュエーション・ポリシー」については策定が完了した。 また高校普通科の特進コース及び中学校の特進進学コースに関する教育改革についても検討を重ね： ・難関大学への受験に特化し、各生徒の 3 年間における学習意識や学力の成長の変化とそれに伴う多様な希望進路に対応したカリキュラム構成を維持する。 ・大学での学びや社会的ニーズに十分に通用し得るグローバルリーダーとしての人材育成の観点に立ち、社会や企業、また国内外大学と連携し、これまでの文系・理系といった枠を越えて様々な分野を横断的に学ぶという「STEAM 教育」（文部科学省推奨）の学びを先進的かつハイブリッド的に取入れる。 という、コース改変の骨子を取りまとめ、2025（令和 7）年 4 月に「アドバンスキャリア（特進）コース」として開設することとした。 その他の「実施すべき活動にかかる計画書」において掲げられた実施可能な項目については、ほぼ実施が完了し、今後はPDCAの「C チェック」段階へと入っている。

2. SDG s に向けた取り組み	SDG s に向けた探究学習や課外活動、国際交流を通じた質の高い教育を推進する。	SDG s をコンセプトにした探究学習を各学年で定期的実施できたか。	中 1～高 3 まで全学的に探究学習を計画的に実施。 〈一例〉 中学 2 年では「行政探究」として、総務省近畿管区行政評価局による訪問授業で地域行政を学ぶとともに、学校周辺のフィールドワークを通して道路等の公共物の安全について調べ、それらに関する生徒たちの改善策についての意見や提案を提出し、行政の対応を含めた回答・フィードバックを受けることで、地域社会・行政への関わりを深めることができた。 中学 3 年と高校 1 年では「社会を変える」をテーマとして、(株)教育と探求社が提供するアクティブ・ラーニングプログラム「ソーシャルチェンジ」を中学 3 年で展開するほか、高校 1 年では実在する企業が社会の中でもつ役割や使命等について学ぶ同社の「コーポレートアクセス」を展開し、「SDG s」についての理解を高め、身近な社会課題を発見し、その解決法を探究することで、地域や社会を動かし、貢献していく力を涵養した。 高校 3 年では、持続可能な社会の創り手としての未来社会を切り開く資質・能力を育成することを目的に、朝日新聞社が提供する新聞活用の探究学習プログラム「EDURAL」に取り組み、SDG s についての学びを生活様式や社会活動に繋げ、自発的・創造的な見方を涵養することができた。 また国際的視野に基づく平和教育として、神戸龍谷高等学校への短期留学生として来日したラトヴィア共和国・首都のリガ市の高校生との国際交流学習会を同校と協働開催した。これには高校特進コースと音楽科の 1 年生と 2 年生が参加し、「Peace and Conflict (平和と紛争)」をテーマにプレゼンテーションやグループワーク、ディスカッション、音楽交流を行い、国際交流を深めるとともに国際平和についての知識と理解を深めることができた。
--------------------------	---	---	---

3. 建学の精神の具現化に関する事項	法要や宗教教育研修会の実施を始めとする宗教教育の充実をはかる。	宗教教育に関する各種研修会を年間行事として実施できたか。 宗教教育に関する取り組みに対して具体的な成果が得られたか。	生徒、保護者および教職員を対象とした宗教教育研修会を年間行事に組入れ実施。 (一例) 地元鹿児島で医師や看護師とともに「鹿児島緩和ケア・ネットワーク」を立ち上げ、終末期の患者やその家族のケアに取り組む長倉伯博氏から講演を実施した。本講演を通して、宗教と医療の両面から「自利利他」や「共生」の社会実践の意義を生徒に考えさせることができた。 本願寺が主催する千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要における作品募集にも毎年応募しており、2023（令和 5）年度は、応募した中学 1 年生の作文が、優秀作品に選出され、同法要において表彰されるとともに朗読の機会も得た。同じく本願寺主催の「全国児童生徒作品展」においても中学 3 年生の作文が入選したほか、文化時報主催の第 4 回作文コンクールでは高 1 の生徒が「宗教と人間と A I」という作品で入選するなどの成果が表れた。
---------------------------	--	--	---

4. 教育活動の展開と充実に関する事項	(1) 教育活動の高度化		
	① 中学校	教育内容の高度化が実現できたか。	新カリキュラムに基づき、各コースの特色を明確に打ち出した学習活動を展開。 ○特進コース 学力の向上を目的に、学校設定教科として国語と数学に演習の授業を設けるとともに、各学期間の休暇中に行う特別補習授業でも5教科の発展的演習を行うことで、高校特進コース進学時における学習レベルの底上げを図った。 ○進学コース 学校設定教科として、資格取得可能な伝統文化（茶道、華道、着付け）の授業を通して、生徒の文化的教養や感性をキャリアスキルとして磨くとともに、各学期間の休暇中に、各教科担当者による指名補習を行い、基礎学力の定着化を図った。 ○音楽科進学コース 学校設定教科として、音楽基礎に特化した授業を各学年において展開することで、音楽の専門的な素養を培い、高校音楽科への進学及び教育課程の連携を図った。
	② 高等学校		
	(ア) 3つの観点別学習評価	「知識・技能」、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」ごとの学習評価ができたか。	教科を横断しての情報共有や意見交換も積極的に行い、各教科の指導、評価を相互に検討することで、客観性のある評価の抽出を行った。
	(イ) 特進コース進学実績を向上させるための仕組みづくりの強化	具体的な方策ができたか。	特進クラス担任会議の週1回ペースでの定期的な実施や、特進教科担当者会議、模試分析会の随時開催など、教科や学年間の連携をもとにした年間の指導計画を立案し実施した。
	(ウ) 専攻選択コース 「学び直し」を主眼に置いた学習のシステム化	具体的な方策ができたか。	知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等をより向上させるため、授業に加えてリクルート社の学習補助アプリ「スタディサプリ」の動画授業を積極的に活用するなど、多角的なアプローチによって学力の向上に努めた。
	(エ) 音楽科学力向上の土壌形成。	具体的な活動ができたか。	国公立大学などへの進路希望に対応するために、特進コース開講の国語、英語の授業を受講できるよう、時間割編成を行った。

4. 教育活動の展開と充実に関する事項（続き）	（2）特色ある探究学習の展開 S D G s の推進をコンセプトとし、特色ある探究学習を展開する。 （3）I C T活用に関する学習の取り組み	①計画的な探究学習ができたか。 ② 自己評価シート（ループリック）の導入ができたか。 具体的な取り組みができたか。	『キャリア教育推進に向けた中期計画』、および『キャリア教育6年間マップ』に基づき、学年ごとの「年間目標」をもとに「年間指導計画」を作成することで、各教科における教育活動とキャリア教育を有機的に関連づけ、推進していくという方向性がより明確になり、教科間の横断的な協力関係を築きやすくなった。 生徒個人が、自身の学習の過程を記録するとともに、客観的な視点に立って自己評価をすることでより主体的な学びに対する理解を深めることができよう、『自己評価シート（ループリック）』の導入の検討を進めた。 マイクロソフト社アプリ「Teams」での授業の諸連絡や教材・資料の配付など、さまざまな機能の活用はこれまで以上に活発になった。 学習支援アプリ「MetaMojji Classroom」を正式導入し、教員と生徒の双方向のやり取りの効率化も図ることができた。 文部科学省が提唱する学校D X化（デジタル化）に関しては、同省が推奨する「学校・保護者等間における迅速な情報共有と、双方の負担軽減にも大きく寄与する連絡手段のD X化」を受け、新たな校務支援システムの導入に関する検討を重ね、モチベーションワークス（株）の校務支援システム「BLEND」の2024（令和6）年度からの導入を決定した。
--------------------------------	--	--	--

5. 進路指導に関する事項	(1) 各コースにおける進路指導の展開 ①高校普通科特進コース 生徒個々の学習状況やレベルに応じた指導を徹底し、国公立大学や難関私立大学の合格率向上につなげる。 ②高校普通科専攻選択コース 生徒が希望する幅広い進路に応じて選択科目を履修できるカリキュラムで、大学合格率の向上をめざす。 (2) 進路ガイダンスの充実 (3) 併設大学への進学率の向上	大学合格率の向上に向けての取り組みとその効果が得られたか。 大学合格率の向上に向けての取り組みとその効果が得られたか。 日々の指導に加えて個別指導を強化できたか。 進路ガイダンスの実施充実ができたか。 相愛大学への進学率の改善（高校3年在籍数の20%を目標）が出来たか	2021（令和3）年度は大阪大学をはじめとする有名国公立大学の合格者を輩出した好実績を維持するために、年度当初より定期的に特進コース担当学会議を開催し、実績向上の一因である個別指導の強化とその方策や、各教科や各学年における指導計画や課題点を情報共有した。特進コースからの国公立大学進学者は、令和 5 年度は 2 名（奈良県立医科大学、大阪公立大学各 1 名（在籍 15 名））に加えて、上智大学や成城大学などの関東圏難関私立大学合格者を輩出することができた。 多くの生徒が学校推薦型選抜（指定校制）を利用して進学するが、近年は総合型選抜との併用や国公立大学進学希望者も出てきており、多種多様な進路指導が求められることから、担任主導が基本となる各生徒への個別指導にいても、進路指導部が状況に応じて直接的に関わりながらサポートをする協働体制を強化した。 中高6カ年の流れを意識したガイダンス計画を完成させ、生徒の進路意識の向上と将来を考えるきっかけの場を提供する土台を築くことができた。 特進コースの教育内容高度化の一環として、冬期休暇中の補習時に京都女子大学協力のもと、法学部の伊藤睦教授より模擬裁判「痴漢事件」をテーマに出張講義をしていただき、大学での学びや研究を通して、生徒が一つの事象を多面的・多角的に分析し、自分なりの考えを表現する能力を養うことで、自ら情報を収集し分析していく探究学習へとつなげることができた。今後も夏に実施する龍谷大学アグリカフェと同様に、中学校在学時より大学との連携を活かしたコンテンツがあるという本校の強みを今後も引き続き強化することとする。 音楽科は例年半数近くを維持してきた（令和元年度 65%、令和 2 年度 47%、令和 3 年度 53%、令和 4 年度 58%）。2023（令和 5）年度も引き続き担任及び実技教員と連携しながら、54%と維持することができている。
----------------------	---	---	---

5. 進路指導に関する事項（続き）	（3）併設大学への進学率の向上（続き）	相愛大学への進学率の改善（高校3年在籍数の20%を目標）ができたか。（続き）	普通科専攻選択コースは、数年前までの一桁台の進学率（平成 27 年度 7%、平成 28 年度 4%、平成 29 年度 11%、平成 30 年度 8%）から、令和元年度15%、令和 2 年度 19%、令和 3 年度 14%、令和 4 年度 10%と 10%台の進学率を維持している。2023（令和 5）年度も18%と好調であり、高大連携の強みを活かした進路指導の成果が現れた結果と言える。
-------------------	---------------------	--	---

6. 生徒指導に関する事項	(1) 生徒対象 安全かつ健康な生活を目的としたサポート・指導のための講演会の実施 ① ネットリテラシー ② 思春期教育 ③ 歯科等健康に関する教育 ④ 交通安全に関する教育 ⑤ 「避難訓練」 ⑥ 「がん等健康に関する教育」 (2) 教職員対象 ① 救命講習 ② カウンセリング研修会 ③ 学外の公的協議会への参加 ④ その他	具体的な講演会等が実施できたか。 具体的な講演会等が実施できたか。	(1) 生徒対象 以下の講演会を実施した。 ① 「ネットリテラシー講演」 ② 「思春期教育」 ③ 「歯科等健康に関する教育」 ④ 「交通安全に関する教育」 ⑤ 「避難訓練」 ⑥ 「がん等健康に関する教育」 (2) 教職員対象 ① 「救命講習」 大阪市中央消防署の協力を仰ぎ、AED使用・人工呼吸・心臓マッサージの研修を実施し、緊急時に備えた。 ② 「カウンセリング研修会」 本校スクールカウンセラー2名による、生徒へのアプローチ方法などに関する専門的な研修を3回実施し、教員の指導力・対応力のさらなる向上をめざした。 ③ 「学外の公的協議会への参加」 生活指導に関する学外の公的協議会に積極的に参加し、中学・高校が抱える問題について意見交換をし、情報収集したものを校内において共有することによって、日々の生徒指導につなげるとともに、その内容・方法を継続的に精査し、生徒一人ひとりに寄り添うきめ細やかな指導の確立を図った。 高気温時における生徒の熱中症対策として、『熱中症対策ガイドライン』を策定した。
----------------------	--	---	---

7. 入試広報・生徒募集に関する事項	(1) 広報活動の高度化 各種広報媒体を用いた広報活動、オープンスクール、学校訪問、ブース説明会等の生徒募集イベントの充実	生徒募集のための様々な工夫がなされ、イベント参加者数の増加ができたか。 生徒募集、広報活動に関するさまざまな取り組みが実施できたか。また成果が得られたか。	① 入試広報イベントの充実 オープンスクールにおいてSDGsや探究学習等、本校独自の教育内容をより親近感を伴って受験生に紹介する「トークライブ」では、教員、在校生、卒業生によるアットホームな雰囲気の中で対談が行われ、会場が参加者で満員となるなど人気のプログラムとなった。 ② 情報発信の強化 知名度を向上させるためのWEB広告等を、広報・情報センター事務室と連携を取り、有効な方策を検討して行った。 公式ホームページを介し、教育内容の発信や入試情報の提供を、積極的に行った。 新たなSNSとしてInstagramを導入し、相愛生の学校生活の様子を写真や短い動画で積極的に発信した結果、1000名近いフォロワーを獲得できたほか、1万回以上再生されている動画もあり、ユーザー世代である受験生やその保護者への認知度向上において大きな可能性を感じる結果となった。 「LINEアカウント」を継続活用し、本校への接触者に対する様々な入試イベント情報を随時発信することで、本校に対する関心を継続させて出願・入学へとつなげた。
---------------------------	--	---	--